

## 地域情報（県別）

### 【栃木】在宅クリニック院長は元ヘルパー「お年寄りに良い介護を提供したい」-吉住直子・れもん在宅クリニック院長に聞く◆Vol.1

2023年7月7日（金）配信 m3.com地域版

2022年12月、下野市の自治医科大学附属病院そばに開院した「れもん在宅クリニック」。在宅医療に注力するクリニックは近年増えているが、同院の医師は中でも異色の経歴を持つ。吉住直子院長は元臨床検査技師であり、元ヘルパー。「介護の分野も医師次第。お年寄りに良い介護を提供したい」と医師を志したというが、ヘルパー時代にどんな経験をしたのだろうか。振り返ってもらった。（2023年6月6日オンラインインタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら



吉住直子氏（クリニック提供）

——過去の取材記事によると、吉住院長は臨床検査技師とヘルパーの経験を経て、医師になったとあります。珍しい経歴だと思いました。

私は栃木県足利市の出身で、2005年に群馬大学医学部保健学科を卒業後、臨床検査技師として自治医科大学附属病院で働きました。この仕事を選んだのは、子どものころから家族が病気でよく病院に入院しており、医療に興味があったこと、また、手に職をつけて人の役に立ちたい思いもあったためです。しかし、入職して半年ほどして父が肝臓がんで亡くなったことで、「このままでいいのかな」と迷うようになりました。

父は私が中学1年のころに脳出血で倒れて入院し、そのときに肝臓がんを抱えていることも分かりました。以来、治療や手術で入退院を繰り返しました。父は私の勤務先の自治医大にかかっていたのですが、この間、私は医療従事者として父に何もできませんでした。臨床検査技師も医療の一端を担う重要な職種ですが、私の場合、患者さんとじっくり接する機会は少なく、最も大切な家族に「なにも力になれなかったな」と。それに、たとえ大病院で先進的な医療を受けたとしても、「人はいつか病気で死んでしまう」という現実を肌身に感じました。

——医療の限界のようなものを感じて、ヘルパーの道に進んだということでしょうか。

そうですね。人が死ぬことは変えられませんが、「最期をどう過ごすか」は変えられるのではないかと思います。もっと人と接する仕事がしたい思いもありました。4年制大学を出て栃木では大きな病院に就職したことを母は喜んでくれていたので、「どこが不満なの？」と私の考えは理解しづらいようでした。なかば家出のような形で、着の身着のまま知人が携わる有料老人ホームに行きました。そこに住み込みで働き、お年寄りと一緒に寝食を共にしつつ、ヘルパー2級の資格を得ました。

——住み込みで介護の仕事とは印象的です。始めていかがでしたか。

すごく楽しかったです。その施設は普通の民家で認知症のお年寄りが10人ほど暮らしており、とてもアットホームな環境でした。お風呂に入りたいおばあちゃんから「背中を流してほしいな」と言われれば私も裸になって一緒に入浴し、私は料理が苦手でしたが入居者に教わりながら一緒に台所に立ちました。中には認知症のために延々とじゃがいもの皮をむき続ける人もいて、気付けば大量のいもが積まれていた、なんて状況に笑い合ったことも。入居者ものびのびと過ごしており、テーブルの上で煮干しの頭を取っている人がいれば、こたつに入って寝ている人もいる、そんな環境でした。

「これで一生を終えてもいいな」と思うくらい、ヘルパーの仕事とその環境は私に合っていたように思います。



施設入居者と談笑するヘルパー時代の吉住氏（写真左、クリニック提供）

#### ——ヘルパーの仕事にやりがいを感じつつも、先生は医学部編入を目指します。

「介護の分野も医師次第なんだ」と思ったことが大きかったです。私はその施設で3年半にわたって働きましたが、高齢者への医療のあり方に疑問を感じるものが少なくありませんでした。

例えば、100歳のおばあちゃんが老衰によって呼吸が止まったときがありました。施設では月に1度か2度、開業医の先生が訪問してくれていましたが、在宅専門ではないため夜間の往診や看取りは行っていませんでした。おばあちゃんは「最期までここで過ごしたい」と望んでいたため、「看取りをしてくれる医師がいれば」と思っていたのですが、当時は見つかりませんでした。おばあちゃんの呼吸停止時に主治医からは救急車を呼ぶように言われ、病院では本人やご家族が望んでいなかった心臓マッサージなどをされ、死亡確認がなされました。

90代のおばあちゃんが腎機能の低下で検査入院をしたときもショックなことがありました。腎臓についてはよく調べられたのかもしれませんが、入院中にその人はADLが大きく落ちてしまい、施設に戻ってきたときはほとんど寝たきりになってしまったのです。「入院するときは普通に歩いていたのに……」と私は絶句しました。ほかに、臓器への治療に偏っており、お年寄りの状態や気持ち、生活の背景が配慮されていないと感じることがいくつもありました。



入居者に教わりながら一緒に料理も（クリニック提供）

### ——そうした経験が「介護の分野も医師次第」という考えに。

私たちヘルパーが入居者の検査入院や服薬について「必要ないのでは」と思い、伝えても、ご家族はほとんど耳を傾けてはくれなかったのです。家族同然にいつも一緒にいる私たちの意見より、月に1度か2度訪れる医師の判断がご家族には絶対的でした。「これは病院で調べた方がいい」と医師が言えばその通りになってしまうので、お年寄りに良い介護をするためには、ヘルパーなどの担い手だけでなく、理解のある医師もまた必要であることを知りました。

こんな経験を重ね、「いい先生と知り合うにはどうすればいいんだろう」と考えを巡らすうち、「私が（医師に）なればいいんじゃないか」と思うようになって。医学部編入を決意してから休日は勉強にあて、夜勤の日も空いた時間に英語論文を読むなどしました。合格に2～3年はかかるだろうと見込んでいましたが、1回目の受験で達成できたのは本当に運が良かったと思います。受験のことは家族以外に伝えていなかったもので、施設のスタッフや入居者には事後報告になりましたが、皆さん「良かったね」と言ってくださいました。母校である群馬大学の医学部に編入できたのは27歳のころです。「高齢者を診る医師になって、良い介護への道筋をつけたい」「ゆくゆくは在宅医療に携わりたい」と思っていたので、まずはスタートラインに立てたことにほっとしました。

#### ◆吉住 直子（よしずみ・なおこ）氏

臨床検査技師とヘルパーの経験を経て医師を志す。2014年群馬大学医学部卒。自治医科大学附属病院で初期・後期研修を受け、JCHOうつのみや病院、さつきホームクリニックを経て2022年12月にれもん在宅クリニックを開院。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

